

ジェンダーとメディア研究が問う 社会と人間のありよう

研

THE FRONT LINE
of RESEARCH

究



ジェンダーとメディア研究は、ジェンダーの視点からのメディア研究であり、ジェンダーの分析に研究の焦点を置くものである。ジェンダーとは、一言で言えば性別（異性愛・シスジェンダーの）「男」や「女」あるいはそれ以外であることを軸に社会的に構成される差異ないしそれに関する認識であり、社会的にはそのような差異や認識を生み出し、再生産・維持するメカニズムにまで言及する。そのようなメカニズムがメディアを含むさまざまな社会制度に埋め込まれているという意味で社会はジェンダー化されており、そのような社会に見られるパターンを特定し、そこに内在する差別や抑圧の問題を捉え、ひいてはそれらのない社会を構想するこ

とが社会的なジェンダー分析である。

メディアに関心を持ったきっかけは二つある。まずヨーロッパで暮らし、学び、研究する中で気づいた表象・言説の問題である。日本のメディアの特異性に気付く一方で現地メディアの問題も気

PROFILE



田中 洋美
Hiromi Tanaka

情報コミュニケーション学部准教授
専門：社会学、ジェンダー・スタディーズ

福岡県生まれ
2007年 ボーフム・ルール大学社会科学部博士(社会学)
2008年 ドイツ在外人文科学研究所財団(現マックス・ヴェーバー財団)ドイツ日本研究所専任研究員
2011年 明治大学情報コミュニケーション学部特任講師
2014年より現職、2019年より同学部ジェンダーセンター長

主な著書・論文
『ボディ・スタディーズ——性、人種、階級、エイジング、健康/病の身体学への招待』(晃洋書房・監訳・2017年)、『ジェンダーとメディア研究の再構築に向けて』『国際ジェンダー学会誌』2018年・16号など

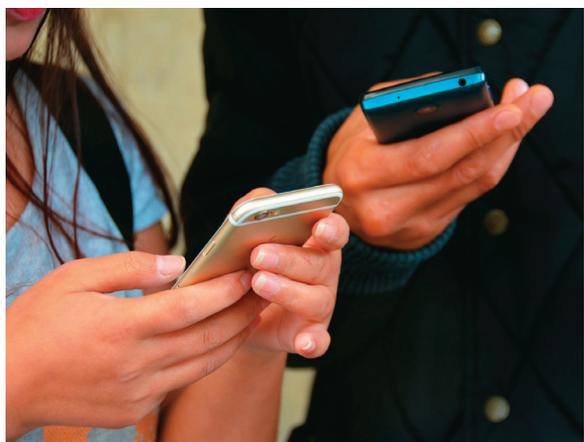
所属学会
日本社会学会、国際社会学会、国際ジェンダー学会など

なった。非西欧人はしばしば不思議でおかしな存在として他者化されるが、特にヨーロッパ文化の中で描かれ、語られる「日本女性」や「東アジア女性」のイメージに違和感を覚えた。しばしば自分の意見や意思のない、受け身で性的な存在として描かれ、認識されていたのだ。背景には性別だけでなく人種、民族、性的指向、障がい、年齢等、さまざまな属性の違い

いに基づき人間を分類し、その中に序列を作り、分断する思考がヨーロッパをはじめ、世界各地で歴史的・文化的につくられてきたことがある。そしてそのような思考は(学術知も含め)人間の知の形成に多大なる影響を与えてきた。このような知の形成にメディアが(そして研究者もが)加担してきたことを知り、愕然とした。

第一にメディアにおける女性やマインオリティの象徴的抹消・矮小化の変化と持続である。女性やマイノリティが登場するコンテンツは増え、矮小化とは異なる表象も見られるようになった。しかし従来の表象パターンは根本的には変わっておらず、一部変化を伴った持続という複雑な様相が見られる。

情報発信できるようになり、かつ一定の影響力を行使するようになった(例えばWeeToo)。一方で新たに形成された言説空間は、個人情報への漏えいや中傷等のリスクもあり、安心できるものとはなっていない(性に関する事件では被害者が非難される傾向がある)。またSNSで公開される画像や動画には人間身体の性化だけでなく自己性化も見られ、自己モノ化の可能性が懸念される。



もう一つのきっかけは、学生時代にマニエル・カステルの情報社会論に触れたことである。20世紀後半の新しい情報通信技術の開発とそれがもたらした一連の変化を情報革命と捉え、産業革命に匹敵するほどの社会変動だとする主張に衝撃を受けた。その後、デジタルメディアが急速に広がり、社会・文化の変化を目的のあたりにし、研究する意義を見出した。

第二にジェンダー規範の再定義である。女性にとって外見美と若さがどれほど重要かは長らく指摘されてきたが、近年そのような規範は、性的であることを含む形で、とりわけ娯楽メディアを通じて生成・強化されている。かつこのような規範が一部男性にも広がっている。こうした規範は楽しみながら消費する過程で無批判に内面化される傾向があり、日々の文化実践やアイデンティティ形成に与える影響が気になるところである。

最後にデジタルメディアの広がりがもたらす社会変動である。従来メディア生成において排除・周縁化されてきた人々がSNS等で

